
ヤンデレ機動六課

ユロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデレ機動六課

【Nコード】

N3019Z

【作者名】

ユロン

【あらすじ】

ヤンデレな機動六課の面々を書いています。ヤンデレ好きな方
ホイホイです。

ヤンデレヴィータ（前書き）

最初はヤンデレ要素はありません。

ヤンデレヴィータ

俺はダゴル・インフエン。あだ名はダゴン。機動六課に勤める青年だ。同僚の1人が俺の名前を間違えたとき、それが周りに広まってこっぴどくなった。

そんなある日、ヴィータに呼び止められる。

「おい、ダゴン…今夜お前の部屋に寄っていいか？」

「ああ…別にいいぜ？」

これといった用事もないのでとりあえず了承した。

「よし！じゃあ後でな。いつとくけどドタキャンすんじゃないねえぞ…」

一瞬ヴィータから不気味な雰囲気か漂った気がした。

「お、おう。」

俺は少しビビリながらも返事した。ヴィータはそれを聞くと行ってしまった。

その後、外にいた俺は六課に戻ると高町なのはに呼び止められる。

「あの…ダゴン君、今夜君の部屋に寄っていいかな？」

なのはが顔を赤くしながら聞いてくる。

「いや、ムリだな。大丈夫そうな日があったら連絡するから待って。じゃ。」

俺は早歩きでその場を離れる。

「え…ちょっと待って」

その声を無視してさらに早足になる。正直彼女は苦手なのだ。

仕事が終わって部屋に戻った頃には夜になり外は真っ暗になった。するとドアをノックする音がした。

「あたしだ。」

ヴィータの声だ。

「はい今開けまーす。」

若干棒読みで返事をする。目の前にネグリジェ姿のヴィータがいた。

「その格好は…?」「何でもいいだろ?」

ヴィータは答えなかった。

「まあこんなところで立ち話つてのもなんだな。入って入って。」

俺はヴィータを優しく招き入れた。

俺は後にこれを後悔することになる…。

ヤンデレヴィータ（後書き）

感想などいただけると嬉しいです

ヤンデレヴィータ2 (前書き)

ヤンデレ入ります

ヤンデレヴィータ2

ヴィータを招き入れた俺は彼女をイスに座らせた。

「ちょっとお茶淹れるから待ってて。」

「ああ。」

俺は互いの麦茶を用意した。それを飲み、ヴィータに問う。

「ところで、何でここに来たんだ？」

「それは…お前と寝たいから。」

「え…マジ？」

「ねえ…ダゴン君…」

俺が聞こうとする前になのはの声が聞こえた。何だか怖い。

「な、なのは…？どうしたの？」

俺は扉に近づき、恐る恐る聞いてみる。

「私の誘いを断ってたけど、私よりヴィータちゃんがいいの？」

扉越しでも怖い。ヴィータは震えている。

「ねえヴィータちゃん、ネグリジエ着てたよね。ダゴン君と一緒に寝る気？」

「別にいいだろ。こいつはあたしが部屋に来るのを認めてくれたんだから。」

怖くなくなったのか、ヴィータは怒りのこもった口調で話す。

「いや、それでネグリジエ着てくのか？」

俺は少しでも恐怖心を消し去るため、ツッコミに徹する。

「いいじゃねえか。どうせあの時『一緒に寝たい』って言っても断るだろ？ だったらこうやって押し掛けちまえればいいって思ったんだ。」

どうすりゃいいんだよ。このまま2人とも帰すか？ いや、ヴィータに悪いな…。

「私、今パジャマ姿なんだよ。一緒に寝ようよ?」

冗談じゃない。そんなことしたら社会的に死ぬ。

「お前なに言ってるんだ?ダゴンと一緒に寝るのはあたしだ。」

ヴィータが反論する。

「一緒に寝ないなら私、ずっとここにいます?」

どうしても一緒に寝たいらしいな...

「それで明日に支障が出たらヤバいな...かといって一緒に寝るのも...。」

俺は深く考え込んでしまう。ラチがあかないので追い返すことにした。

「ヴィータ、なのは、2人とも戻れ。」

「「え?」「」

「戻れ。」

2人とも驚くが俺は無感情な返事をする。

「何でだよ!」

「戻れ!」

俺は威嚇するようにヴィータに怒鳴った。

「「わかったよ……」」

さすがに効いたか、なのははドアを離れたようだ。足音が遠ざかっていく。ヴィータも部屋を出ていった。

「これでいいんだ、うん。」

そして俺は眠りについた。

しばらくすると目が覚めた。

ややこしくなったとはいえ許可したヴィータを追い返すのは今になって思うと少し悪い気がした。

「後で埋め合わせするか…」

俺がつぶやくと

「その必要はないぜ。」

隣から声がした。驚いてその方向を見るとヴィータが寝ていた。ネグリジエで。

「お前…なんでここに!？」

「いちや悪いかよ?本当は追い出した後で後悔してたんじゃないかねえのか?」

「ぐぐ。」

図星なのでなんとも言い返せない。

「ていうかなんで隣に寝てるんだよ？」

俺が一番気になることを質問する。

「お前が大事だからだ。お前の事が好きなやつはきつと他にもいる。あたしはそいつらに負けたくねえ。お前が他の女と楽しく過ごしてるところなんか見たくねえ。」

ヴィータの話を聞いて少しゾツとした。ものすごい執念を感じたからだ。

「俺を好いてくれるのは嬉しいけど…そのために危害を加えるなよ？そしたらすぐ嫌いになるからな。」

「…ッ!？」

ヴィータは目を見開いてこの世の終わりのような顔をした。

「まあとりあえず今日は一緒に寝てやる。そのかわり他言無用だ。いいな？」

ヴィータの顔はいつもの表情に戻った。

「当然だ。追い返したってぜってー帰んねえからな。じゃ…おやす

み。
「

グイータはすぐ眠りについた。俺も眠りについた。そっぴやなのは
はどうしようかな…？

ヤンデレヴィータ2 (後書き)

次は別のキャラでやります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3019z/>

ヤンデレ機動六課

2011年12月10日18時51分発行